

風流必評判

一名好名文傳授

風流必評判

671
1



門 八選
番 671
卷 1

本宗



風流多評判

一 風流能ハ其身の仕合

男撰の女何りきり
媒まうせに史指ハ大遠
一付ハ評物ぞう

二 色道方便の説法

意好之傾國ハ其虚
常所控里の論
若接石の今川

明治三十八年
九月十一日
購

卷之一

好色文傳授繪事并
作者洛陽申行政君
其書後之評判ハ外題替せし
三年々々年早あり

久保 野口
久保 野口
久保 野口

御用

三

不懐神ふくわいしんの志乃しの重寶じゆうほう

保多たけた又また弱よわ侍しやく娘むすめ心こころ
小こ夕ゆふ思おもひひ付つけけのの鐘かね書かき
深ふかいい夜よの本ほんにに書かけけ付つけけぬぬ

男おとこ

一 風かぜののよよいい其その身みはは仕し合あ

色いろののせせややいいののちちののううららのの王わうののままのの通と路ろ通と物ぶつ一いっ橋はし中ちゆうたたと
てて三さん条じょう寺じ所じよ又また信しん者しや人にん河かりりききりり男おとこ為なせせののたたををか
ここううたたののままだだ。物もの如ごとくく弱よわくくすす馬うまはは名なををららぬ
女めのの不ふ可か言げんはは小こ奇きうう。又また心こころををいい男おとことと見みままへへららををらら
新あたらししのの福ふくハハええ道みちててがが。唇くちびるををりりりりよよいいるるすすとと辰うら巳み也や
よよ噴はなききををおおげげああ。たたをを色いろをを色いろととよよななととししききるる人ひとのの妹いもうと
有あ。くくらら類るいををくく色いろ好このままるるととままををいい男おとこ娘むすめ。もも年とし
もも二に九くのの福ふく。ももううたたをを色いろをを色いろとと思おもひひ。ももううたたををららぬ
四よ波なみ。くく知しるる人ひともも有あ。ままんん籠かご。ららぬぬ清しみづ水みづ不ふ定ぢやう。ああらら使たより
来き。まま



折有へしきくこのまへへしきくす
びりゆははるしと言葉あせし下ごころ又お
有くちがへしき

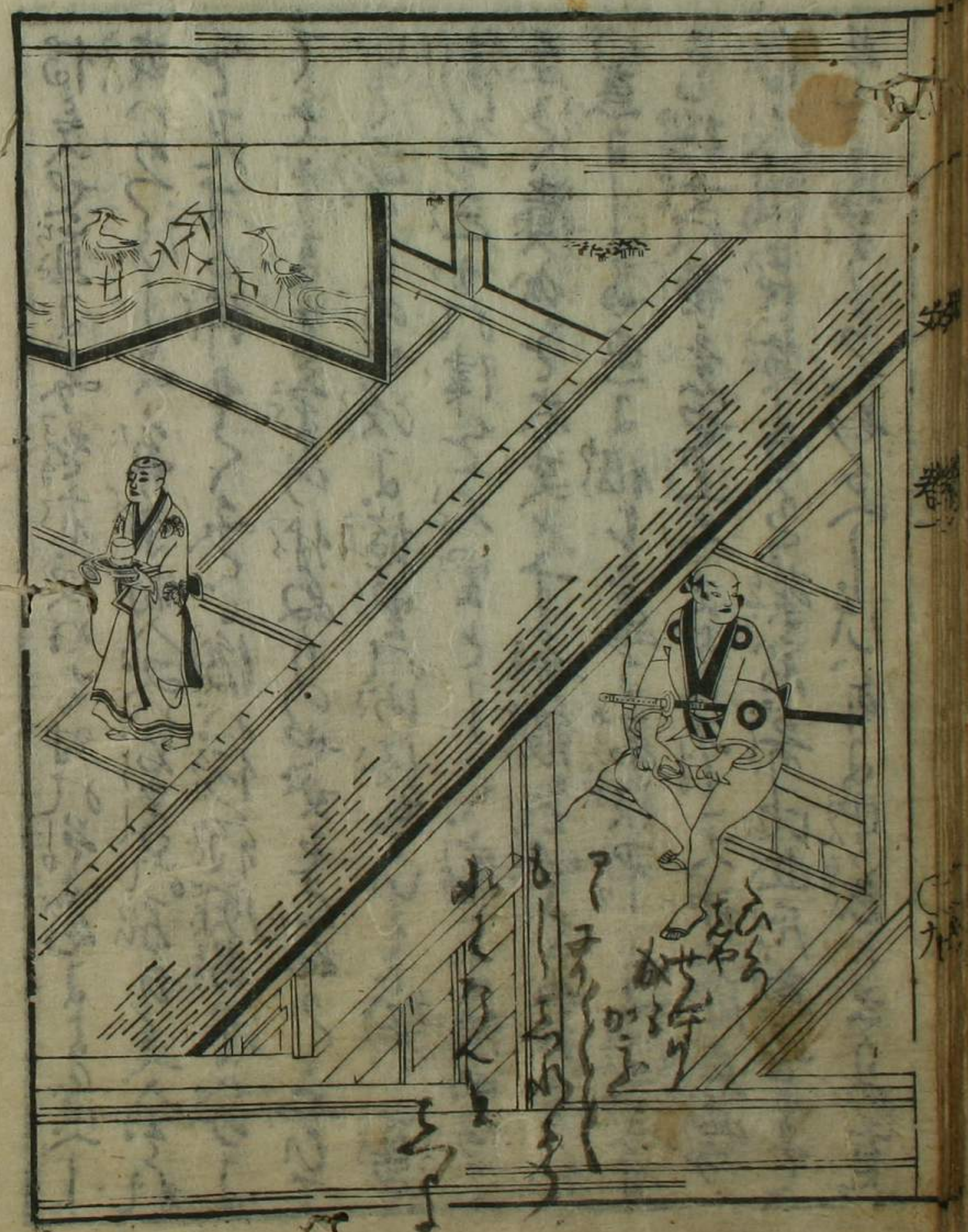
二 色乃方便の説法

あまの系はよりと合せぬ玉の強もしこ中しく絶えよ
かゆまへうしあく結なよ今この始終をそま
ぬいよすすきやくい神の方便をいひて色れ
成せんすを教まへ人ぬく教く新波はゆ
のまあせし好も司果の道と結す人故道一
ま梓色乃大祖伊特諾伊特冊の二神よりい
乃物り氣氣和合の妙道今感あり時お女元の二

乃色よ又端所極里の二つ有く極これふ八に在
玄常所よの後家より娘を極里よの太まより極嫁
とこの先常所の志の愛男斗めと女の慕を極ふ
何らす身持心を入女れ事よ入るまへひつらぬりの也その
身持と去ハ女のおまよふハ不及去彼よを色味大に味
嗜常よ云りかきま女ハ天性心源りのめてこれ
愛へをつしむりの也び人よいひふ大しを結ても
外へりるるありとちをいする是れ第一の方便あり
今をこれ志の娘の弟也娘の上をいひて幼稚云
より色敬年奴もて志のたを元源氏伊勢極
そまかれ色草抵よてびししたるしとハ知とを流石に

もろくもき方え何せの十の四のぬ有なれも好色
傳交あり不叶と云りあり十三の六の糧有との命
くくくくす十回より上の懐妊もろくも早く上げ故
におかしな命を捨てたためせよ多し悪悪のハ
先び覚悟来一也一年の中は娘月四月有是を
除ぬまといふに交くもろくもす好色男女れ
為びまの刺し記し此術を多しを便してそ
知せぬれぬ木ありぬ女もみよ干不叶と云り
ゆ又勝く心深き女の媒有はろくも多直は
後へ上げ時女の考有は計介は目立物なれ
細は潤小針へ一針せむにせもろくも是

傳交也直は多き方便は時れを處よは後へ
或はろくも多き粉入の草子れあり入られ
を刃する砕あり多し後は何行用有有あり
てそそきと草子の付ぬりの也女もみよくといて
いと愛もの也次は極里のゆはをいそ原傳
刺の三ヶの律を大里とく一宿は傾里河
至る貴公をたまとす金銀をいそ加意あれ
は意可しる悪は恨と云は不根中よ又深は有
是極女れ極意也上たまらり下天神麻衣は
白人風呂舞子と茶屋茶比丘形悪嫁まで
是よあろくもろくも上げ介は中意と云りの有



新人女あまきばへく志め侍と云ん中巻金も
るすむとつ心くそ極女よりうー家よ
又観念一名羅と云ふと心侍と云ふもや組
や扇屋の仕おの針夢じ類有是の極女と遠金
眼をひくも押付不為の扱きと云ふすゆもあ
と靴中伸又史指するも有是の各がそ介
向きの夢扱よんを対面先より去れ申よー張
三兩と極一その日とを角を巻きと云ふは仕
けよて寄る尾すも也と内伸あといそ身よ何
際有そのあく女の方より意あまきばくーん
とつらー主人の目をさすとの極のうきめよあ

をたはせたり有るなりげん一切の女は
あー板傾園といふ極本より教身男を何きと云
りの目こようとしてあまき極めきば極は捨忘
る極君の習也初は又七夜と振舞本の内にて帯
とくゆひもあまきと大長におん向をせあ充
相身不吸付煙草不為難との何を云ふも不
洞面十後の群よりあまきあまきいもくあ
あまきよの履扱一儘巻きと極一を夜中身
何とをあくついで大切よかりの也意好る女は情
をひとよあまきばをいあまきばをいあまきば
とつらーとちりのあまきばをいあまきばをい

女の心折るんやうなう也。是皆女とやせん
貞婦とやいひんそら。鐵石とていひ堅不を
て金銀を奪んとつや。家を失つらる也。男也
をいひ利は同月に入ららる。鉄石中あまごい
つとときわれ松を有べ枝つきまじらひ色道也と
好色大和尚志のさるまはたせ。後のさかんこと
くそまごより色道の真義とてさるまはたせと
かぎる。

三 懐神せざるゝ志のき宝

黄氏月ハいといひを。薄草の宿。志きるるま
まちく。おれぬのいりきるれ。内洞の社まご
ありたえりし。のこのむれ。乃一声日てま
やうく心やなく。さまんと。うの娘のえよひ
そいさまきのべ。おれぬ。そまこと。なれ付ぬやうに
い丸め。おれぬ。留まよ。箱の中へ。あげ入ま。娘を
そまごうと。ん付らる。は。舞を。うこく。よ。一。る。よ
へく。ん。ま。ご。へ。

老言おちがり。めさん。心ざり。のね

そまごうら。う。ま。ま。ご。と。り。ま。ご。く。や。ま。ご。お。れ
を。あ。り。せ。ぶ。お。ら。よ。人。の。あ。り。し。て。面。氣
を。ま。ま。ご。ま。ご。ぬ。い。ら。る。お。れ。ぬ。の。り。ん。ご。う。と

